萬鉄五郎記念美術館

木の間通信 KONOMA

萬鉄五郎
記念美術館
ニュース
2013.6.1
NO.7

詩人と美術 瀧口修造のシュルレアリスム 展

2013年７月13日（土）～９月23日（月・祝）

1

2

3

4

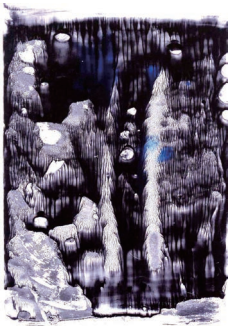
1.パウル・クレー「内なる光の聖女」 1921年　宮城県美術館蔵／2.瀧口修造「《私の心臓は時を刻む》より《わたしにさわってはいけない》」 1962年　富山県立近代美術館蔵／3.中西夏之「コンパクト・オブジェ」 1962年　浅川コレクション（足利市立美術館寄託）／4.フランソワ・ルネ・ロラン「アンドレ・ブルトンと瀧口修造」1958年　富山県立近代美術館蔵

瀧口修造（1903-1979）は、近代日本を代表する美術評論家、詩人であり、戦前・戦後の日本におけるシュルレアリスムの理論的支柱となった人物です。

本展では、瀧口と交流のあった国内外のシュルレアリスト（ダリ、ブルトン、デュシャン、エルンスト、クレー、ミロ、瑛九、鶴岡政男、他）の作品とあわせ、瀧口の詩作や評論活動をたどることで、日本の美術界で瀧口が果たしてきた役割を検証します。

【休館日】 月曜日（祝日の場合はその翌日）　【開館時間】 8：30～17：00（入館は16：30まで）
【入館料】 一般600円、高校・大学生350円、小・中学生250円　＊20名以上の団体 各50円引

「詩人と美術 瀧口修造のシュルレアリスム」展 関連事業



瀧口修造「cat.no.301」 年代不明 個人蔵

○講演会／瀧口修造の眼差し

講師：吉増剛造氏（詩人）
日時：7月28日（日） 午後2時～3時30分 〈参加無料〉

○講演会／瀧口修造の〈北〉－震災・貝殻・シュルレアリスム－

講師：巖谷國士氏（美術評論家・明治学院大学名誉教授）
日時：9月8日（日） 午後2時～3時30分 〈参加無料〉

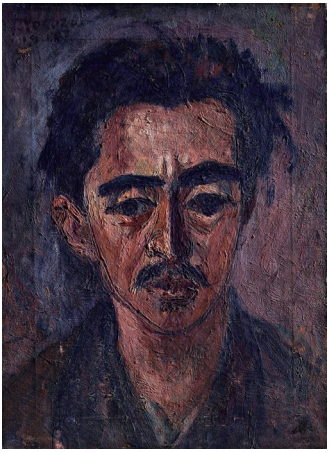
○誰でもできる デカルコマニーとポエムの ワークショップ

講師：岩崎美弥子氏（詩人）
日時：8月4日（日） 午後1時30分～3時30分 〈参加無料〉
対象：小学生以上 定員：先着20名

※各行事とも、問合せ・申込は、萬鉄五郎記念美術館（TEL 0198-42-4402）まで

棟方志功が愛した萬鉄五郎 展

2013年4月20日（土）～7月7日（日）



板画（版画）家の棟方志功が、萬鉄五郎を敬愛し惚れ込んでいたことは、ご存知でしょうか。その棟方愛蔵の「口髭のある自画像」がこの度、当館に寄贈されました。40年ぶりに一般公開となるこの自画像にあわせて、棟方が萬への思いを綴った直筆原稿《萬鐵の繪心》を展示します。

【休館日】 月曜日（祝日の場合は翌日）
【開館時間】 8：30～17：00（入館は16：30まで）
【入館料】 一般400円、高校・大学生250円、小・中学生150円
＊20名以上の団体各50円引

萬鉄五郎「口髭のある自画像」 油彩・画布 1914年

喫茶「八丁土蔵」

萬鉄五郎の本家「八丁」にあった土蔵を移築復元した、ギャラリーと喫茶スペースです。自慢のオリジナルコーヒー「蔵」「八丁」を、ぜひ一度ご賞味ください。 営業時間：10:00～16:00（lo.15:30）

萬鉄五郎記念美術館
八丁土蔵ギャラリー

花巻市東和町土沢 5-135 萬鉄五郎記念美術館内
9:00-16:30 月曜休（祝日は翌日）、12/29-1/3休 入場無料

iwate コンテンポラリーアート
伊藤 正 展

4月20日（土）
～7月7日（日）

花巻市東和町在住、伊藤正さんの新作展。

iwate コンテンポラリーアート
戸村茂樹 展

7月13日（土）
～9月23日（月）

盛岡市在住の版画家のドローイングと水彩画の世界。

Gallery Space けやきラウンジ

花巻市東和町安俵6-90 東和図書館内 tel.0198-42-3205
10:30～19:00（最終日は16:00まで）入場無料

佐々木愛展

6月2日（日）
～6月30日（日）

みんなの愛ちゃん新作披露。けやきにGo!

上村京子展

7月1日（月）
～7月31日（水）

けやき連続開催。心に響く身近な自然の表現。

土澤芸術商店ぷると

花巻市東和町土沢8-115 こっぽら土澤内 tel.0198-29-5959
11:00～17:00　日曜定休　入場無料

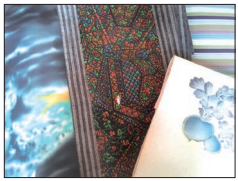
橋場あや木彫小品展
―野場SUN区の子どもたち―

6月1日（土）
～6月7日（金）

表情豊かな子どもたちからイメージした木彫展。

OBI展

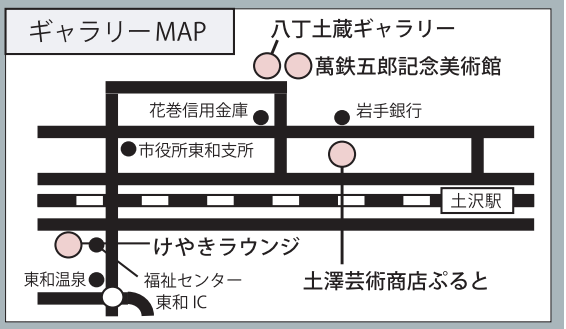
7月1日（月）～7月13日（土）



和装の帯には、遊び心あふれるデザインがたくさんある。日本の粋な世界。

美術の街「土沢」ギャラリー情報

萬鉄五郎記念美術館とあわせて、「美術の街」土沢めぐりをしてみてはいかがでしょうか。



丁字路

館長コラム

自画像の「正面性」

木板画家棟方志功が長年、その魅力に惚れて愛蔵してきた萬鉄五郎『口髭のある自画像』（１９１４年）が、当館で40年ぶりに一般公開され愛好家の話題を呼んでいる。

萬鉄五郎は、当時つぎつぎに興ったヨーロッパ近代絵画の新しい美術動向、ゴッホなどの後期印象派、マチスらのフォヴィスム、ピカソのキュヴィスムなどに反応して、積極的に取り入れ、それらと格闘して描いた自画像を多く残した。

とくに、『赤い眼の自画像』、ムンク風の『雲のある自画像』、『点描風の自画像』は見る者に強烈な印象を与える。自己の顔、その内面の風景を絵画表現の実験場として「自我」を追求し続けた。萬が若い時代、果敢に新しく切り拓いた造形的探求の代表作である。日本の近代絵画の真の幕開けを告げるもので、現代の我々を魅了する。もしこれらの自画像作品と美校卒業制作『裸体美人』がなかったら、萬は平凡な画家として歴史から忘れ去られただろう。

それらの自画像はいずれも堂々とした「正面像」で描かれているものが多い。現在のように自画像が正面像として描かれるようになったのは最近のことである。

自画像が絵画表現のひとつのジャンルとして確立されたのが19世紀後半になってからである。そもそも自画像を含む肖像画が盛んに描き始められたのはルネサンス期からである。それ以前の古代ローマでキリスト教が国教になってからルネサンスまで一千年続いた中世は、個人より「神」が重んじられ描かれたのはキリストの画像だけで、肖像画は廃れた。

ルネサンス期の肖像画はレオナルド・ダ・ヴィンチの『モナリザ』に代表されるように斜めを向いた「四分の三正面像」であった。そしてガラスを使った鏡が発明されて画家自身を単独で描く自画像が制作されたが、いずれも「四分の三正面像」で、「正面像」は神であるイエス・キリスト像だけに許された。そのような状況にあって注目すべきは、ドイツ・ルネサンス最大の画家デューラーが28歳のとき描いた『１５００年の自画像』は堂々たる「正面像」である。しかもデューラーは自らをキリストの姿にタブらせ、イタリアより遅れているドイツ美術の改革者たらんとした使命感に燃えた強い意志が表された質の高い自画像である。問題にならなかったのは、デューラーが宗教改革者ルターの信奉者であったことと晩年まで公共の場に展示されなかったからである。

萬鉄五郎記念美術館長　中村光紀

アルブレヒト・デューラー『自画像』
1500年　アルテ・ピナコテーク蔵

萬鉄五郎記念美術館　岩手県花巻市東和町土沢５区 135　Tel.Fax.0198-42-4405　8:30am. ～ 5:00pm.
yorozu00@cocoa.ocn.ne.jp　http://www.city.hanamaki.iwate.jp/sightseeing/yorozu/　月曜休館（祝日の場合その翌日）

発行人 / 東和町土沢商店街商店会連絡会 会長 小原茂明　Logo design / 杉本吉武